

第百七十四話 その名も悲し、「恋飯島」(レンパン島)

大東亜戦争終戦直後、南方地域には、120万人もの将兵及び民間人が所在していた。陸海軍将兵はポッドム宣言によって、本邦に帰還せしむることとなっていたが、日本軍を管理した英、蘭、米及び豪には色々な思惑があって、南方地域からの帰還は区々であり、大変なご苦労をお掛けした。それらについては次話等で書きたい。本話では、「恋飯島」と呼ばれた捕虜収容所について述べる。「飯が恋しい島」、その捕虜収容所の実態が感得されるではないか。



1 無人島レンパン島等を捕虜収容所(中間集結地)に指定

南方軍地域を管轄したのは、英軍、蘭軍、米軍及び豪軍である。うち、英軍はビルマ、マレー、シンガポール及びタイを管轄した。当該地域には約70万人に及ぶ日本軍将兵・民間人が所在していた。英軍は、日本移送のための中間集結地を定め、その一つに無人島であるレンパン島やガラン島などを指定した。

2 レンパン島について

レンパン島は、インドネシアのリアウ諸島州に属する島である。リアウ諸島内の主要な島の一つであり、バタム島の南に位置している。面積は165.83平方キロメートル。北のバタム島および南のガラン島とは橋で結ばれている。赤道直下に位置し、植生は熱帯雨林に覆われている。マラッカ海峡、シンガポール海峡に近く、シンガポール南方60kmの沖合にある蘭領の無人島である。

3 抑留人員数

資料により、様々なデータがあって確定できないが、増田弘著「南方からの帰還」(慶大出版会2019年)に掲載されている英陸軍省のデータでは、レンパン・ガラン96,911名(1946/4/13現在)となっている。運よく生き長らえたものは一年後に帰還できた。

4 抑留の実態

(1) 英軍の無人島利用の思惑等

レンパン及びガランの両島は、第一次大戦中にドイツ人捕虜二千名が送り込まれ、マラリアで全滅した曰く付きの島である。英軍の思惑は、孤島に捕虜を隔離すれば、脱出は不可能であり、警備も不要となる。この為、苦しい台所事情の英国には最適の方法であった。あとは日本兵が開墾を急ぎ、自給自足できるか否かであり、例え日本兵がマラリヤ熱に倒れてもそれは連合軍の責任ではなく、南洋地域では一般的死因だから批判されることもない。一石二鳥、三鳥の良策として実施されたのである。」

(前掲書30p)と前掲書は指摘している。

(2) ウィキペディアでは

「連合国軍は十分な食料を支給せず、日本軍兵士は島に生息する鼠や蛇、サソリまで食べて飢えをしのぎ、「恋飯(れんぱん)島」と呼んだ。」と。

(3) 前掲書では、ある兵士の証言として、

「狭いレンパン島に七万もの兵隊が入ってきたので野菜代用の野草、海草、木の芽など二から三日で取り尽くしてしまった。・・・一日(米)百グラム、小さな湯飲み茶碗ぐらいで、これではとうてい足りない。皆真剣になって栄養カロリーの取れる魚、野草、海草を集めるのに苦労した。」と

(4) 労苦体験手記 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦(兵士編)

同様体験記を以下のURLで確認できる。

https://www.heiwakinen.go.jp/shiryokan/heiwa/06onketsu/0_06_030_1.pdf

* 報復とは言えここまで惨くなれるものか!

(第百七十四話 了)